

「熊野の道」の歴史を实践する —世界遺産「大峯奥駈道」の担い手団体 「新宮山彦ぐるーぷ」を事例として

山本 恭正

総合研究大学院大学 文化科学研究科 比較文化学専攻

要 旨

本研究は、歴史の専門家ではない普通の人びとによって構成される登山団体「新宮山彦ぐるーぷ」が、「熊野の道」を整備することによって、熊野の信仰の歴史の一端を「道」という形で可視化させ、地域社会において共有されるようになるまでの過程を明らかにする。また、新宮山彦ぐるーぷが主導して再生した大峯奥駈道の現代史の意味と価値を論述し、歴史学の分野における知識生産と社会实践の在り方について考察する。そして、フィールド研究を通して、歴史学の成果を参照しつつ、新宮山彦ぐるーぷの活動をパブリック・ヒストリーの視点から民族誌的に記述する。

パブリック・ヒストリーの第一の眼目は、歴史学の「場」の開放であるとされ、歴史学を応用する多様な現場へと広く開かれてきたが、その「場」の営利、非営利という目的の違いは問われない。世界遺産の「熊野の道」である大峯奥駈道の南半分のコースは、修験者や登山者が歩くことによって、近年、創出された「道」とされている。「道」の担い手は、和歌山県新宮市に拠点を置く新宮山彦ぐるーぷという登山団体で、その実践は、「熊野の道」の歴史に関わりたいと願う人びとの参画を受け入れながら、幅広く展開されてきた。

本稿が他のパブリック・ヒストリーの先行研究と比べて特徴的である点は、担い手が「道」で歴史を作ることや、「道」を文化遺産にするといった目的とは一線を引いて、自分たちの活動をあまり公にせず、あくまで登山活動の一環として活動している点である。結果的に、後年、文化的、歴史的な事象として地域社会から受け止められることになるが、歴史学の分野で何らかの訓練を受けた人びとと協働して、「道」のプロジェクトを成し遂げてきたわけではない。「熊野の歴史や文化、生き方を究める」という理念の下で、当初は民間だけで活動が展開されてきた。現在においても彼らの実践を介した現代史は、世界遺産を含む学術的な報告書や歴史書のなかでの記述（記録）、評価がなされていない。

本稿では、新宮山彦ぐるーぷが担ってきた「道」の歴史や地域社会にとっての意味が、世界遺産リストへの記載とともに紡がれてきた「公式な」歴史と相互に影響を与え合い、補完し合う関係に着目して論述する。また、両者の歴史を対話させ、世界遺産としての「熊野の道」の歴史を考察し、フィールド研究の立場から現代史を紡ぐ方法論を提示する。

キーワード：新宮山彦ぐるーぷ、歴史実践、世界遺産、地域社会、大峯奥駈道、修験道

Practicing the History of the “Road of Kumano”: A Case Study of the “Shingu Yamabiko Group”, an Organization Supporting and Maintaining the World Heritage “Omine Okugakemichi”

YAMAMOTO Yasumasa

Department of Comparative Studies,
School of Cultural and Social Studies,
The Graduate University for Advanced Studies, SOKENDAI

Summary

This study clarifies the process how the Shingu Yamabiko Group, a mountaineering club comprising non-specialists in history, maintained the Road of Kumano to visualize the “path” as a part of the Kumano faith and allowed the local community to share its history. It also discusses the significance and value of the contemporary history of the Omine Okugakemichi, which was revitalized under the leadership of Shingu Yamabiko Group, and examines the nature of knowledge production and social practice in the field of historical studies. The activities of the Shingu Yamabiko Group are ethnographically described through field research from a public history perspective, with reference to the results of studies.

The primary focus of public history is considered to be opening up “places” for historical study. Various sites where historical studies are conducted have been broadly opened to the public, regardless of whether the “place” is for profit or not. The southern half of Omine Okugakemichi, the World Heritage Site of the Road of Kumano, is considered to be a “path” that was created in recent years by *shugen* and mountain climbers who walked the route. The Shingu Yamabiko Group, a mountaineering club based in Shingu City, Wakayama Prefecture has been maintaining the path, and the Group’s activities have been undertaken with the participation of people who wish to be involved in the history of the Road of Kumano.

What makes this paper unique compared to previous studies of public history is that it addresses the fact that the Group does not intend to create history on the “path” or seek registration of the “path” a cultural heritage site. The Group does not publicize its activities, and activities are conducted as part of its mountaineering activities. Members have not worked with specialists in the field of history to carry out the road project. Their activities, however, eventually came to be recognized by the local community as a cultural and historical event. Under their philosophy of “studying history, culture, and the way of life of Kumano,” their activities were initially conducted only by private citizens. The activities of modern history through their practices, therefore, are not referred to, recorded or evaluated in academic reports or historical books, including those on World Heritage sites.

This paper explores how the Shingu Yamabiko Group’s activities and its significance to the local community are related to and influence each other with the “official” history as recorded when Kumano Path was registered on the World Heritage list. The paper also presents a methodology how contemporary history is created from the standpoint of field research by bringing both histories into dialogue and examining the history of the Road of Kumano as a World Heritage Site.

Key words: Shingu Yamabiko Group, historical practice, world heritage, local community, Omine Okugakemichi, Shugendo

- | | |
|-----------------------|-------------------------|
| 1. 研究の目的 | 4. 「新宮山彦ぐるーぷ」による「道」の再創造 |
| 2. 研究の背景と手法 | 4.1 道普請に至る2つの出会い |
| 2.1 修験道と熊野信仰 | 4.2 設立者・玉岡憲明と千日刈峰行 |
| 2.2 パブリック・ヒストリーを用いる意義 | 5. 大峯奥駈道の管理・保全 |
| 3. 調査地・調査対象としての「熊野の道」 | 5.1 公的機関による管理・保全 |
| 3.1 熊野地方の概要と近現代 | 5.2 南奥駈道の管理・保全と山小屋の建設 |
| 3.2 世界遺産「大峯奥駈道」と修験道 | 6. 考察 |
| | 7. 結論 |

1. 研究の目的

本研究は、歴史の専門家ではない普通の人びとによって構成される登山団体「新宮山彦ぐるーぷ」が、「熊野（地方）の道」を整備することによって、熊野の信仰の歴史の一端を「道」という形で可視化させ、地域社会において共有されるようになるまでの過程を明らかにする。また、新宮山彦ぐるーぷの活動・実践をパブリック・ヒストリーとして定位すると同時に、アカデミック・ヒストリーとしての大峯奥駈道の歴史言説が新宮山彦ぐるーぷに与えた影響、相互の関係性について考察するものである。本稿では、歴史を实践する（歴史実践）こととパブリック・ヒストリーを同義とし、歴史実践とは新宮山彦ぐるーぷが登山活動において熊野の歴史とかかわりをもつ諸行為、例えば南奥駈道における調査、学習、整備、記録、情報発信、交流、山小屋管理、遭難救助などの日常的な実践のことを指して使用する。

私は、社会学、文化人類学、民俗学などを背景に、2021年4月から2022年9月まで1年6か月にわたって、和歌山県新宮市に住み込み、文化遺産の担い手たちを中心とした参与観察やインタビュー形式のヒアリング調査を実施してきた。こうしたフィールド研究を通して、歴史学の成果を参照しつつ、新宮山彦ぐるーぷの活動をパブリック・ヒストリーの視点から民族誌的に記述する。そして、新宮山彦ぐるーぷが主導して

再生した大峯奥駈道の現代史上の意味と価値を論述し、歴史学の分野における知識生産と社会実践の在り方について考察することを目的としている。

世界遺産「紀伊山地の霊場と参詣道」の構成資産には、霊場に関連する国指定文化財の「道」が複数ある。しかし、熊野地方には、文化財指定されていない熊野古道、古座街道、小栗街道、筏師の道、尾鷲トレイルといった、近年、主に民間団体によって整備された草の根の道も多く見られるようになった。本稿では、こうした、文化遺産化、観光化の文脈で発見、再発見された道を総じて「熊野の道」と表記する。ちなみに熊野古道にも、熊野街道、熊野道、熊野路など時代や地域区分によって複数の呼称があり、世界遺産リストに記載され、国の文化財（史跡）に指定されている熊野参詣道とは区別して記述する。

新宮山彦ぐるーぷは、現在、大峯奥駈道の南半分のコースである南奥駈道¹⁾の整備、管理、コース上にある3つの無人山小屋（持経宿・行仙宿・平治宿）の維持・管理をしており、世界遺産の「道」の担い手団体だといえる。設立者は元地方銀行員の玉岡憲明で、もともとは和歌山県新宮市周辺のメンバーで構成された登山団体だった。行政の枠組みを超えて「熊野の道」の道普請に取り組んだ団体のさきがけであり、登録メンバー構成は和歌山、三重、奈良、大阪、

近隣府県、その他からなり、2022年の段階で、100人以上（レギュラーメンバーは、熊野地方在住者を中心に10～20人程度）にも及んでいる。メンバーの平均年齢は高齢化しているが、活動回数は減少しておらず、活動は基本的に、週1回、日曜日に現地集合、現地解散で実施する。「道」と山小屋は1,000メートル級の山々の山頂付近にあり、車両で入れる中腹付近から山頂まで、重い荷物を背負って軽々と山を登り、作業を行っている。

従来のアカデミックな歴史学では、専門的な歴史家だけが史料や文献などの「正しい読解」に携われると考えられ、その結果、専門家以外の人びとが歴史を作り上げることから排除されてきた。それに対して、パブリック・ヒストリーと呼ばれる新しい歴史学の分野では、研究者や専門家以外の普通の人びとも歴史学の知見や技能、そして思想を生かす幅広い実践に加わっている。一般市民を巻き込んだこうした実践は、学問的な動向の如何にかかわらず、メディアやソーシャルネットワーキングサービス（SNS）の発達に伴って、社会のあらゆる場面に浸透しつつある。その範囲は、博物館や歴史的文化財の保全・展示といった領域だけでなく、テレビ番組や漫画・アニメ、ドラマやゲームなどの日常的なメディアにまで及び、家族のルーツ探しといった身近な調べごとにも盛んになりつつある。

また、近年はこうした実践を支援することがアカデミックな活動とみなされるようになった一方、専門家による知識生産や社会实践の成果還元の一環として、アカデミックな歴史を真に必要としている人びとと共有していく動きがある。この動きは、「専門的な歴史学者が非専門的な普通の人びと、すなわち『大衆』と交わり、その歴史や歴史の考え方に意識的、能動的に関与する研究や実践」（菅 2019b: 8）である。こうしたパブリック・ヒストリーの動向は、「学問の公共性」への関心と要請の高まりという時代背景に連動している（菅 2013）。

パブリック・ヒストリーの第一の眼目は、歴史学の「場」の開放であるとされ、それは歴史学を応用する多様な現場へと広く開かれてきたが、その「場」の営利、非営利という目的の違いは問われない（菅 2019b: 25–29）。世界遺産の「熊野の道」の1つである大峯奥駈道の南半分のコース（通称、南奥駈道）は、修験者や登山者が歩くことによって、近年、再創造された「道」とされている。南奥駈道の担い手は、和歌山県新宮市に拠点を置く新宮山彦ぐるーぷという登山団体で、その実践は、「熊野の道」の歴史に関わりたいと願う人びとの参画を受け入れながら、幅広く展開されてきた。

パブリック・ヒストリーとしての新宮山彦ぐるーぷの活動は、熊野の人びとにとっての「道」の価値を社会的に共有し、自分たちに連なるストーリー、あるいは、地域に根差して、前向きに生きていくための歴史として、社会的に位置づけ直すという意義があると考えられる。「日常的な実践において歴史とのかかわりをもつ諸行為」（保莉 2004: 50）である歴史実践という視点は地域社会における共同性を育むことと無関係ではない。

パブリック・ヒストリーは歴史と歴史学を「考える」だけでなく、何らかの形でそれらを「実践する」ことが重視される（菅 2019a: 7）。新宮山彦ぐるーぷは熊野信仰の歴史や修験道の信仰実践の場所といった価値を念頭に置きつつ、「道」を整備してきた。三井寺（滋賀県大津市、正式名称は園城寺）をはじめとする修験団体（あるいは修験者）による全道を通した大峯奥駈修行の復興（復活）は、地域社会と「熊野の道」の歴史をつなげ、「道」を介した共同性と「熊野修験²⁾」と呼ばれる那智青岸渡寺³⁾を拠点とした信仰実践⁴⁾まで創出させた。

「道」の担い手たちは、歴史を作ることや、「道」を文化遺産にするといった目的とは一線を引いて、自分たちの活動の意味や価値、現代史的側面にはあまり目を向けず、あくまで登山活動の一環として活動してきた。結果的に、後年、文

化的、歴史的な事象として、地域社会から受け止められることになるが、歴史学の分野で何らかの訓練を受けた人びとと協働して、「道」のプロジェクトを成し遂げたわけではない。「熊野の歴史や文化、生き方を究める」という理念の下で、当初は民間だけで活動が展開されてきた。現在においても彼らの実践を通じた現代史は、世界遺産を含む学術的な報告書や歴史書のなかで記述（記録）、評価⁵⁾がなされていない。

もちろん、「道」への取り組みは、「熊野の歴史を实践する」ことの一部であり、「道」を含む他の多様な要素、プロセスが熊野の歴史を作り上げてきた。しかし、団体として比較的早い時期・段階から民間だけで、険しい山々の稜線に長距離にわたる「道」を、ある程度歩けるように整備した事例は、熊野地方において他にはない。新宮山彦ぐる一ぶの活動・実践は、その後の熊野地方の「道」を介した歴史実践に大きな影響を与えたと考える。

以下では、新宮山彦ぐる一ぶが担ってきた「道」の歴史や地域社会にとっての意味が、世界遺産リストへの記載とともに紡がれてきた「公式な」歴史と相互に影響を与え合い、補完し合う関係に着目して論述する。また、両者の歴史を対話させ、世界遺産としての「熊野の道」の歴史とは何かを考察し、フィールド研究の立場から現代史を紡ぐ方法論を提示する。

2. 研究の背景

2.1 修験道と熊野信仰

本章では、パブリック・ヒストリーの理論とともに、熊野の信仰の歴史を概観することで、新宮山彦ぐる一ぶの事例を分析するための切り口となる視点を整理して提示したい。熊野地方の人びとにとって、「道」が物質的な側面というより、精神的な側面において重要視される根拠を示し、「道」が失われた過去の信仰の歴史を可視化させ、地域（集団）としてのアイデンティティを喚起させる役割を果たしていることを指

摘する。なお、本節では、新宮山彦ぐる一ぶが実践する「熊野の道」の歴史とは何かを明らかにするために、聖地（霊場）としての熊野の信仰の概要と、地域研究としての先行研究（e.g. 林 2007）で取り上げられることが少ない負の側面を中心に論述する。

2004年7月7日にユネスコ世界文化遺産リストに記載された「紀伊山地の霊場と参詣道」は、「吉野・大峯」、「熊野三山」、「高野山」の3つの山岳霊場、それらを結ぶ「大峯奥駈道」、「熊野参詣道」、「高野町石道」という参詣道、その周囲を取り巻く「文化的景観⁶⁾」から構成されている。なかでも、大峯山（正式名称は山上ヶ岳）は日本における山岳信仰の中心地とされる場所で、大峯奥駈道は修験道の修行の根幹をなす峰入り⁷⁾と呼ばれる儀礼実践が精緻化された場所⁸⁾とされている。

修験道は熊野地方と密接な関係がある。熊野三山と総称される熊野本宮大社・熊野速玉大社・熊野那智大社が鎮座し、古代以来、日本の代表的な霊場として多くの人びとの信仰を集めてきた。熊野信仰は修験道と同義ではないものの、「熊野の修験道の全盛期にあたる古代末から中世にかけては、熊野三山が山岳信仰、修験道の一大センターとしての役割を持ち、諸国の修験や山伏は毎年熊野への参詣を引率して熊野詣を行ってきた。」（豊島 1990: 38）

修験道はそもそも山中他界観を前提とした山岳信仰と密接な関わりをもって発展を遂げた信仰形態である。山岳信仰は国土の約75%を山間部が占めることから日本人にとっては身近で、日本文化の根底にある精神性⁹⁾を備えていると考えられる。修験道は自然崇拜や山岳信仰を基盤として、山に仏教的な意味付けを施すにあたって大きな意味を持った。しかし、山そのものに畏敬の念を持ち、山を崇拜の対象とする山岳信仰に対して、修験道は山で修行するものの、活動の舞台は里や平地であることが多く、厳密には山岳信仰と同義ではない。

宗教人類学者の植島啓司によると、「修験道は分かっていないことも多々あるが、日本古来の山岳信仰に、神道、さらには仏教・道教・儒教・陰陽道などの影響が加わって一つの形を成したものであるという理解はなされている」という。さらに、植島は宗教学の立場から大きく以下の2つの解釈があると指摘している（植島 2009: 180-181）。

(1) 奈良時代以前に遡る原始宗教

さらに庶民信仰のすべてがそこに含まれている。祈祷、唱え言、お祝いなど。すでに7世紀には仏教とは別に成立していたとする。

(2) 中世に成立した日本固有の宗教

山岳仏教が仏教（特に密教）、道教などの影響を受けて11から12世紀に1つの宗教体系として成立した。それは7世紀から12世紀に至る成立期（世界観）、16世紀までの確立期（教団組織化）、19世紀までの展開期と分類される。

熊野の修験道は、江戸時代の修験者の定住化による「里修験¹⁰⁾」化によって、修験者の移動への規制が厳しくなり、明治政府が打ち出した神仏分離令や修験道禁止令などの宗教政策によって、「熊野三山の仏教・修験道的要素は徹底的に弾圧を受け、三山としてのつながりを持つ、広域の大霊場という性格は失われた。」（天田 2019: 149）その様子は、「はっきりとした史料が残されておらず、うかがい知ることが難しいものの、全国の氏神信仰と同様のものだったのではないかと推測する研究者もいる（山崎 2007; 天田 2019: 149）ことから、霊場としての熊野は事実上、壊滅状態に陥ったことが予想される。

このように壊滅的な状況にあった熊野の修験道に関連する「道」が、世界遺産という文脈で再評価されたことについて、社会学者の田中滋は、「日本の国家形成過程において起こった悲劇的な歴史を象徴する『負の遺産』という側面も持っている」と指摘している（田中 2020a: 6）。

その根拠として、「世界遺産となった重要なポイントが、神道と仏教のたぐいまれな融合にあるとするならば、明治政府がおこなった宗教政策である神仏分離・廃仏毀釈、神社の祭神の差し替え、そして神道国教化への歩みは、この世界遺産の歴史を語る上で最も重要な悲劇的な出来事」だからだと述べている（田中 2020a: 5）。

明治政府が掲げた宗教政策のうち、特に修験道禁止令と呼ばれる政策が、全国に展開した熊野三山に対する熊野詣¹¹⁾を事実上の終焉へと追いやったとみられる。修験道禁止令（1872年）は、修験道の2つの宗派¹²⁾（本山派と当山派）を仏教宗派とは認めず、本山派は天台宗に、当山派は真言宗に帰属させるという厳しいものであった¹³⁾。しかし、「熊野三山にとってもっとも打撃となったであろうことは、熊野三山に熊野詣の参詣者を送り込む組織が各地の修験者の環俗によって崩壊したこと」（田中 2020b: 49）である。この信仰システムの瓦解によって、中世から続いた熊野詣は、その命脈を絶たれることになった。

熊野三山は、「1871年の太政官布告『官社以下定額・神官職制等規則』で制定された近代社格制度によって、本宮大社は国幣中社（1915年に国幣大社に昇格）、速玉大社は県社（1915年に国幣大社に昇格）、そして熊野那智大社は県社（1921年に官幣中社に昇格）」となり、国有化（官有化）された（新宮市 1937: 748; 田中 2020b: 50）。この事実は、山岳信仰の中心地として日本人の信仰を支えてきた聖地が、数ある神社の1つとして、国の管理下に置かれたことを意味し、全国から人が集まり、活況を呈した信仰の歴史とは程遠い状況にあったことを示している。それでは、近代から現代に至るまで、熊野の信仰、特に山岳信仰や修験道に関わる歴史は誰によって、どのように継承されてきたといえるのか。また、こうした事実に気づき、自覚したうえで、現代における熊野の信仰（修験道）に関わる「道」を特定し整備するといった歴史的な実践は、地域社会においてどのような意味を持つだろうか。

本稿では、こうした問題意識に基づいて、明治政府の宗教政策後、熊野地方において使われなくなった大峯奥駈道を最初に整備した新宮山彦ぐる一歩を「道」の現代史の事例として考察する。そして、主に世界遺産リストに記載された内容や専門家や歴史学者、ジャーナリストらが表象する歴史 (Academic History) と、「熊野の道」の歴史とつながり、新たに作っていく活動 (Public History) とを対比・対話させる形で論述するため、本稿ではパブリック・ヒストリーの手法を用いることとする。

2.2 パブリック・ヒストリーを用いる意義

パブリック・ヒストリーとは、「過去を過去のこととして過去に留め置くのではなく、過去と現在との終わることのない対話を通じて、過去を現在に関わるものとして現在に引き戻して、さらにこれからの未来に引き伸ばして、人びとのために役立つ『現代史』」(菅 2019a: 3-4) である。また、「どんなに古い過去の歴史であろうと、またどんな遠くの場所の歴史であろうと、その歴史が<いま、ここ>に生きる人びとにとって重要な意味をもっていれば、パブリック・ヒストリーの課題となり得る」(菅 2019a: 3) とされている。

パブリック・ヒストリーという概念はアメリカで誕生したとされ、創始者の1人とされるロバート・ケリーは、当初目指した目標について、「パブリック・ヒストリーとは、アカデミアの外側での歴史家の仕事と、歴史学の方法について論及するものである」と述べている (Kelly 1978: 16)。

本稿の調査対象である新宮山彦ぐる一歩は、聖地としての熊野や修験道の歴史を学習し、かつて修験者や山伏たちが修行したであろう「道」を復元した団体として位置づけられる。したがって、パブリック・ヒストリーの受け手である。一方で、世界遺産の道である大峯奥駈道を作り上げた団体でもあることから、パブリック・ヒ

ストリーの重要な作り手、あるいは送り手でもあると考える。

民俗学者の菅豊は、パブリック・ヒストリーで重要なことは、「パブリックという言葉、簡単に官に回収させないためにも、その実践のパブリックの意味合いをアカデミックに問い返し、検証し、批判し、その結果を実践にフィードバックし、その実践を不断に修正する再帰的で順応的な仕組みを構築する」(菅 2019b: 59) ことだと述べている。

パブリックとは公的な、公有の、公共の、公開の、などの意味を持つ単語である。政治学者の齋藤純一は、「公共性」という言葉が用いられる際の主要な意味は、3つに大別できると述べている。「第一に、国家に関する公的な (official) ものという意味、第二に、特定の誰かにではなく、すべての人びとに関係する共通のもの (common) という意味、第三に、誰に対しても開かれている (open) という意味」である (齋藤 2000: viii-ix)。

齋藤によると、「この三つの意味での『公共性』はお互いに抗争する関係にあり、国家の活動がつねに『公開性』 (openness) を拒もうとする強い傾向をもつ」(齋藤 2000: ix-x) という。「『共通していること』と『閉ざされていないこと』の両者を同一の平面におけば、『共通していること』はほとんどの場合『公共性』を一定の範囲に制限せざるをえず、『閉ざされていないこと』と衝突せざるをえない局面をもつ」と指摘する (齋藤 2000: x)。

「公共性」の議論はそのまま歴史学にもあてはまるだろう。世界遺産という国家によって選別された「地域の歴史」が広く知られている一方で、日本国民全体に「共通している」日本史は、「地域の歴史」が「閉ざされていない」状態と、同時に成立することができない。つまり、新宮山彦ぐる一歩の歴史実践は、世界遺産である大峯奥駈道を再創造したにもかかわらず、現状では日本国民全体に共通した日本史とはなりえな

い。菅が指摘している通り、パブリックという言葉、つまり「公共性」は世界遺産で表象される歴史学において、簡単に国家の歴史に回収されてしまう傾向がある。

本稿では、世界遺産の「道」を創出させた熊野の歴史実践が、歴史学としてアカデミック／パブリックという二項対立と区分表現を乗り越えてつながり、眼前の社会に向き合う社会实践を含む営為として再構築される可能性を提示したい。その調査方法は、担い手たちと活動とともにするなかで、気づいたこと、知り得たことを記録するだけに止まらない。熊野の歴史に興味や関心を抱く者同士として、聞き取り調査や雑談、活動に同行して力仕事などの手伝いをするなかで、定期的に対話を繰り返し、問題意識を共有する関係性の構築を試みた。

こうした前提を踏まえ、筆者は学術的な内容によって構成されるユネスコ世界遺産リストに記載されている本文や文化庁、各自治体や市町村の教育委員会などの「熊野の道」の歴史に関する言説を分析した。また、新宮山彦ぐる一歩の実践には先人たちの思いや足跡としての熊野の歴史が反映されている。彼らの歴史実践を描くことは、これまで広く知られてきた熊野の世界遺産としての歴史¹⁴⁾ (cf. 本中 2022: 137–153; 寺西 2005: 81–107) に、新しい視角を提示することであると考えている。また、歴史を扱うことができる、あるいは扱うことが許されている、人文社会科学分野の研究者にとって、地域社会において共有されている熊野の歴史が、世界遺産というグローバルな文脈のなかで問い直されることによって、国民国家の歴史という共通性と誰もがアクセスできる公開性という境界を捉えなおすという意義がある。

以上をまとめると、本論文でパブリック・ヒストリーを用いる意義とは、歴史を作るという行為の主角を担い手たちの歴史実践として捉え、歴史をどのように語るべきか、あるいはどのように、何が語られるべきかを、研究者と共に再

確認したり、再検討したりすることだと考える。また、新宮山彦ぐる一歩の活動・実践が、熊野の世界遺産としての歴史のなかで、取り上げられてこなかった背景についても触れ、今後の両者の対話を通じて開かれる、地域社会が主導する持続可能な文化遺産マネジメントの可能性についても言及したい。

3. 調査地・調査対象としての「熊野の道」

3.1 熊野地方の概要と近現代

本章では、本論文の研究の目的である「熊野の道」のアカデミック・ヒストリーとパブリック・ヒストリーを対比・対話させるにあたって、前提となるアカデミック・ヒストリーについて概観する。また、大峯奥駈道に関する人文社会科学分野の知見を中心に、熊野地方の場所的な特性と大峯奥駈道の信仰的な側面に焦点を当てて論じていく。

熊野地方は和歌山県、奈良県、三重県の3県にまたがり、海、山、川に囲まれた平野部が少ないエリアである。こうした地理的特徴から、農林水産業のなかでも林業と漁業が盛んだったが、拡大造林政策後の安価な外国材の流入、減反政策などで、基幹産業が衰退したことにより人口が減少し、国内でも有数の過疎化・高齢化が進んだ地域になった。また、大都市圏からの交通面でのアクセスが不便で、物理的な距離のわりに移動に費やす時間が多く発生するうえ、他のエリアに比べて道路や鉄道などの交通インフラの整備が遅れている¹⁵⁾。

熊野が位置している紀伊半島南部は、このような地理的特徴を持つにも関わらず、大和平野に近く、古事記や日本書紀といった神話や日本史にもたびたび登場する。院政期に盛んになった熊野詣や源平合戦での熊野水軍の活躍はとりわけ有名である。近世には、徳川御三家の1つである紀州徳川家が置かれ、熊野の木材や備長炭は江戸において広く流通し、支藩の新宮藩水野家は御附家老として、参勤交代を免除され、江

戸と和歌山に拠点を持ち、豊かな財政を誇ったといわれている。

一方、幕末期にはフランス式兵法を採用した新宮藩が長州征伐で活躍したことや紀州徳川家の時代に優遇されたことが原因となって、明治維新後の新宮藩の境遇は一転して悲惨なものとなった。明治政府による廃藩置県の際には、新宮藩から新宮県となった後、新宮県の真ん中を二分して流れる熊野川を境に和歌山県と三重県（当時は度会県）に行政区分が分断された。また、明治末期には日本を揺るがした大逆事件¹⁶⁾の一つの舞台ともなった。

この時、逮捕された者のなかには、新宮出身の医師・大石誠之助や新宮の浄泉寺住職・高木顕明らがあり、彼らの無実を訴える市民団体「『大逆事件』の犠牲者を顕彰する会」（和歌山県新宮市）が設立され、2018年1月19日には新宮市が大石を名誉市民にすることを決定した。明治政府によって冷遇された事柄は他にも、熊野地方において特に厳しく進められたといわれる宗教政策の1つである神社合祀による鎮守の森伐採の歴史¹⁷⁾がある。

近代以降、熊野は基幹産業である林業を柱として、木材生産地域へとその機能が特化していく。しかし、林業が盛んになるにつれ、熊野川流域の濫伐を招き、1889年の紀伊半島大水害の際は、熊野川上流にある奈良県十津川村では、被災規模のあまりの大きさに村人の一部が村を捨て、北海道への移住を余儀なくされた（田中 2021c: 72）。

昭和初期には、熊野の豊かな自然が「吉野熊野国立公園」に組み込まれ、熊野の海岸部と瀨峡の風景が注目されるようになり、戦中期には高野山と共に国家・天皇制と関係する霊地・史蹟に焦点があてられるようになった（神田 2010: 137）。また、戦後になると、熊野川の豊かな水量ゆえに大規模な電源開発が行われ、戦後復興の一翼を担ったともいわれる（田中 2021d）。しかし、ダム建設によって地元住民たちのなかに

は、川底にヘドロが溜まって汚染が進み、アユやウナギといった川魚の量が建設以前に比べて、激減したという人もいる¹⁸⁾。

こうした現状について、和歌山県新宮市出身の芥川賞作家で、1990年に「熊野学¹⁹⁾」の拠点とすべく「熊野大学²⁰⁾」を設立した中上健次は、1987年に寄稿した「熊野大学」の設立趣意書とともれる檄文のなかで次のように述べている（熊野大学HP²¹⁾より抜粋）。

もうがまんならないところに来ているのが、熊野の人間の本音ではあるまいか。黒潮の波の豊かさに魅かれ、この熊野の地に遠つ祖が拠を定めたのは何千年前か。神を畏れ、仏をうやまい、日々清く生きてきた。それがこの有様だ。

汽車がこの間全通したと思ったら、いつの間にか、本数が減った。熊野に〈近代〉は一番遅くやって来て、一番早く去っていくという事なのか。それなら〈近代〉が打ち壊した山を返せ。原っぱを返せ。熊野川のあの川原の黒い砂利を返せ。人の情をかえせ。魂をかえせ。

熊野。ここで子宮を蹴って日を浴びた俺も四十。空念仏は要らない。ここが豊かで魂の安らぎと充溢の場所とする為なら立つ。本宮、那智、速玉、三山の僧（氏子）兵とも、水軍（海賊）ともなって、山、海をゆき、熊野を害する者（物）らと戦おう。

こうした思いは、近代以降、熊野と呼ばれるエリアで生きた人びとに共有されてきた自然の豊かさや美しい景色といった記憶に基づいて発せられている。地域の人びとの記憶のなかの風景と世界遺産である熊野の聖地としての文化的景観との間には、景観人類学における「場所」と「非場所」のような景観に対する意識上の齟齬²²⁾が存在している。

3.2 世界遺産「大峯奥駈道」と修験道

ここでは、世界文化遺産リスト本文や既存のアカデミックな先行研究において、大峯奥駈道と熊野の修験道の歴史がどのように表象され、広く出回っているかを概観する。2005年に世界遺産登録推進三県協議会から発行された『世界遺産 紀伊山地の霊場と参詣道』から、大峯奥駈道について記載された世界文化遺産リスト本文の一部を次の段落に抜粋して、要約して記載する（三重県・奈良県・和歌山県教育委員会 2005: 57）。

大峯奥駈道は、霊場「吉野・大峯」と「熊野三山」を南北に結ぶ修験者の修行の道であり、吉野山から大峰山寺、玉置神社を経て熊野本宮大社まで約80キロメートルの道のりがある。経路の大半は標高千数百メートル級の山々を越える険しい起伏に富んだ尾根道で、随所に行場が設けられている。伝説によれば、修験道の祖とされる役行者が8世紀初めに開いたとされ、これを踏破する奥駈は修験道で最も重視される修行である。12世紀の史料によると、道の途中の行場で「宿」と呼ばれる信仰上の拠点^{しゆく}が約百二十カ所定められ、17世紀以後になると七十五カ所の「靡」^{なびき}に整理された。この中で、57カ所が世界遺産の登録資産に含まれる。修験者は奥駈をすることが義務づけられ、修行としての奥駈は回数を重ねることが重要とされていることから、今日でも多くの修験者の団体が毎年奥駈を実施している。

ここからわかるのは、大峯奥駈道は熊野信仰と関連する「道」ではあるが、熊野詣や熊野三山にいたることを目的とするのではなく、歩くこと自体が目的とされる修験道の要素が色濃く反映された「道」ということである。特に「大峯山は修験の根本道場とされ、吉野から熊野に至る大峯奥駈道の途上にあり、大峯奥駈道周辺

の大山塊は修験道揺籃の地」(鈴木 2009: 12)とされている。また、大峯山(山上ヶ岳)(図1を参照)頂上付近にある大峯山寺以南は、通称『奥通り』と呼ばれ、険しい山道が連続する行場(修行場)となっている(天田 2019: 107)。

政治権力の影響により盛衰興亡を繰り返した近世以前の修験道の歴史については、本稿が世界遺産リスト本文に記載されている歴史とは異なる視点を提示するものであるため省略する。近代以降は、前述した明治の宗教政策によって、峰入りや奥駈が消滅し、熊野三山も神社となり、修験者の活動が行われなくなった。再び表立って、大峯奥駈道に修験が戻ってくるのは、1886年に金峯山寺が蔵王堂を本堂として寺院に復帰、修験道が復活し、吉野山から前鬼までの奥駈も再開された(森沢 2006: 5)時だと考えられる。

その後、吉野から峰入りして、太古の辻より前鬼に下る奥駈が主流となり、太古の辻から熊野へと至る45キロメートルほどの南半分のコース(図1)は、深い藪に覆われて通行困難となっていた。時折、このルート^を歩こうとする修験者や登山者がいたようだが、「いずれも手ひどい目に遭って再度挑戦する人が無かった」(玉岡 1992)といわれている。戦後、この「道」の奥駈を復活させようと三井寺の関係者が活動を始めた。これは、中世から三井寺が奥駈を行ってきたことに由来する。日本山岳文化学会の城島紀夫によると、「1955年に平治宿を新たに建設し、1965年に南奥駈道の修験行を復活させて、大峯奥駈の全道の行場を巡る修験行事を再興させた」(城島 2021: 81-82)と記している。

つまり、世界遺産である南奥駈道は、奥駈という修験道の歴史においてのみ存在し、戦後、三井寺の関係者が儀礼実践を再開するまで、公に認識されていなかった。マテリアルな意味での「道」は、新宮山彦ぐる一ふによって、ルートの特定と整備がなされるまで、100年以上にわたって、深い藪に覆われてほとんど使われていなかったのである。

4. 新宮山彦ぐる一歩による「道」の再創造

4.1 道普請に至る2つの出会い

組織として1974年に発足した新宮山彦ぐる一歩には前身団体がある。昭和30年代に「新宮山の会」という名称で活動していた。また、1967年からは設立者の玉岡憲明が講師を務める、主に子どもたちを対象にした「歩け歩け教室」が新宮市のイベントとして開催されていた。このイベントには、那智青岸渡寺を拠点とする熊野修験の高木亮英も子どもの頃、姉に連れられて、参加したことがあったそう²³⁾。玉岡は、「体験を通して物事を考える」ことの重要性を常々口にしてきた。1994年に玉岡が作成した「創立20周年を迎えてのご挨拶」と題した寄稿文には、次のような団体の紹介がある（新宮山彦ぐる一歩 2016: 80-81）。

私達の山彦ぐる一歩は、単なる山歩きの集団ではありません。山は遊びの場ではなく、学びの道場として受けとめて、行事は山歩きだけに止まらず、幅広い活動を展開して参りました。

例えば、使用済の切手を集めて、後進国（ママ）の医療援助に役立てようと11回（半年毎）で552,000点の新旧切手や外国切手を送ったり、歳末助け合い募金をはじめ、持経宿山小屋、大台教会建築²⁴⁾、大雲取地藏堂²⁵⁾ 改築等の募金にも積極的に取り組んで、その地域の自然保護や活性化に協力も致しました。又、浅里・西谷奥ねのつまりやまに子ノ泊山への山彦新道を拓いたり、今西錦司先生1500山に向けて白髭岳²⁶⁾に登山ルートの整備等も行い、以後の登山に大きく貢献も致しました。

新宮山彦ぐる一歩は、2つの出会いによって、当時歩くことができなかった大峯奥駈道の南半分を復興させ、文化財行政（奈良県十津川村、下北山村）から委託される世界遺産の「道」の

管理団体になった。1つ目は、日本の生態学者で文化人類学者、登山家でもあった今西錦司との出会いである。1905年に設立された日本山岳会での活動を通じて玉岡と知り合った今西は、よく学生を連れて熊野地方の山々を訪れた。

今西は日本の野外科学の先導者とされ、探検と登山および学問が不可分であることを繰り返し指摘し、「パイオニアワーク（創造的な登山）」と「野外（field）」を重視していた（今西 2014）。戦前・戦中には在籍していた京都帝国大学で白頭山遠征隊を率いたり、内モンゴロ学術調査隊に参加したり、京都探検地理学会を設立したりして、様々な分野、人物に多大な影響をもたらした。戦後は、日本山岳会マナスル登山の先発隊長としてネパール国ヒマラヤ山脈を踏破するなど、登山ブームの火付け役としても知られている。

今西が新宮山彦ぐる一歩に与えた影響とは、自身が会長を務めた日本山岳会とは別に創設した「十二支会」と呼ばれる年に一度、その年の十二支を名に含む名前の山に登る活動において、1984年に三重県紀宝町にある子ノ泊山を訪れたことである。玉岡は事前に十二支会のメンバーを案内するため、山彦新道と呼ばれる登山道を作った²⁷⁾。それ以降、玉岡は土木作業を含む道づくりに傾倒するようになったと当時を知る仲間たちは口を揃える²⁸⁾。

2つ目は、玉岡が昭和50年代に出会った本山派の行者で、和歌山県田辺市の出身で大阪府河内長野市に居を構えた前田勇一との出会いである。前田は熊野信仰に篤く、1974年に聖護院（京都府京都市）の修験団体による奥駈に参加し、「荒廃してさびれた南奥駈の道を刈り開いてよみがえらせ、日本古来の精神文明を見直そう」との決意をもって、田辺市を拠点とする「奥駈葉衣会²⁹⁾」を結成した。

前田はその後、1979年に私財をなげうって南奥駈道再興の活動拠点とするための持経宿を大峯奥駈道のルート上に建設し、10年の闘病生活（食道がん）を続けながら南奥駈道を復興させる

活動を続けた。1973年から奥駈葉衣会が刊行した機関誌『奥駈』は、前田が1981年に亡くなる直前まで発行され、「大峯山にまつわる民間伝承」など大峯山の信仰に関する数多くの資料が含まれている。

玉岡は、奥駈葉衣会の活動について、「熊野に住んでいる我々として傍観することは出来ない。熊野の浮上の一役にもつながることとして積極的にこの会を支持した」（玉岡 1992）という。前田が鬼籍に入った後、奥駈葉衣会は自然消滅となり、持経宿山小屋の管理は新宮山彦ぐる一ぶが引き継ぐことになった。屋根のペンキ塗り、便所の汲み出し、薪の補給などを継続して行ったが、「この山小屋を活かすには、只管理だけでは不十分で、繁った道を刈拓くしかない」（玉岡 1992）と結論を出した。

玉岡がこの結論に至るまでには、今西錦司らが提唱していた「パイオニアワーク（創造的な

登山）」を志向している点と、前田勇一が亡くなる一年半前、最後の闘志をかき立てて、東奔西走、孤軍奮闘の結果、持経宿山小屋を建設し、「死の直前まで大峯奥駈道の再興に想いを馳せられていた」（玉岡 1992）ことが影響している。

4.2 設立者・玉岡憲明と千日刈峰行

前田の活動を個人的に手伝っていた玉岡と新宮山彦ぐる一ぶの有志達は、同氏の遺志であった南奥駈道の刈り拓き作業を引き継いだ。1984年6月9日から延べ3年間で24回、稼働日数315日かけて太古の辻から本宮備崎までの大峯奥駈道の南半分のコース、約45キロメートルを貫通させた。行者の千日回峰行になぞらえて「千日刈峰行」と名付けられ、道づくりに必要な資金の大半は、仲間内からの拠出によって賄われた。引き続いて、翌年から7年かけて2巡目を実施、さらに続けた3巡目も7年かけて終了させた（表1）。

表1 新宮山彦ぐる一ぶの主な活動の歩み（新宮山彦ぐる一ぶ 2016 を参照）

新宮山彦ぐる一ぶ活動の主な歩み	
年月	出来事
1974年4月	新宮山彦ぐる一ぶ発足（世話人代表：玉岡憲明）
1975年5月	天台寺門宗・三井寺の大峯奥駈行七十五靡（順峯）復興サポート
1975年5月	奥駈葉衣会と協賛行事（上葛川～葛川辻～笠捨山）
1975年6月	奥駈葉衣会・新宮支部結成（支部長：玉岡憲明、1977年8月解散）
1977年7月	奥駈葉衣会行事「釈迦ヶ岳清掃登山」協賛行事
1978年8月	今西錦司1000山「釈迦ヶ岳」慶祝登山支援
1981年5月	平治宿・手動式水洗便所完工
1981年5月	前田勇一逝去（享年68歳）、持経宿小屋の維持・管理を引き継ぐ
1983年1月	十二支会（今西錦司創設）例会「亥ヶ谷山」協賛行事
1983年11月	十二支会例会に向けて「子ノ泊山」に山彦新道開設
1984年3月	十二支会例会「子ノ泊山」協賛行事
1984年6月	千日刈峰行1巡目開始（持経宿～平治小屋間）
1985年11月	今西錦司1500山（白髭岳）登頂登山支援
1986年11月	千日刈峰行1巡目終了（太古ノ辻～熊野本宮間45km、延315日）
1987年4月	千日刈峰行2巡目開始
1987年4月	熊野修験第1回奥駈行サポート（高木亮英代表他）

1988年5月	アルミ缶回収運動（同年9月までに、172,364個回収、265,194円計上）
1989年9月	行仙宿敷地造成（1990年4月完成）
1990年6月	行仙宿・行者堂竣工（1990年5月着工、延985日、費用約2,000万円）
1991年6月	平治宿小屋建替え（1991年3月着工、延360日）
1993年4月	千日刈峰行2巡目終了、延174日
1993年10月	千日刈峰行3巡目開始
1994年10月	深仙灌頂堂・深仙宿避難小屋修復（1994年6月着手、延229日）
1995年10月	行仙宿補給路開設（1994年4月着手、延99日）
1997年11月	今西錦司白髭岳登頂記念碑建立除幕式（今西先生を偲ぶ会5周年）
1999年11月	千日刈峰行3巡目終了、延275日
2000年10月	環境庁自然保護局から自然歩道関係功労者賞を受賞
2003年10月	行仙宿管理棟竣工（2002年6月敷地造成、2003年3月建築着工、延682日、費用440万円）
2005年1月	2004年度シチズン・オブ・ザ・イヤー賞（シチズン賞）授賞式
2007年7月	釈迦ヶ岳山頂の釈迦像復元支援（2006年11月釈迦像解体荷下ろし、2007年8月落慶法要）
2008年1月	十二支会協賛登山（5巡目・子ノ泊山）
2010年8月	ソーラー発電により小屋が点灯する（行仙宿）
2012年4月	大峯奥駈道二ツ石～関伽坂峠尾根～前鬼小仲坊ルート整備
2013年3月	近畿中国森林管理局と「多様な活動の森」整備活動に関する協定書締結
2013年4月	世話人代表交代（玉岡憲明から川島功へ）と事務局（沖崎吉信）を設置
2013年7月	行仙宿「社員合宿研修会」ツアー（十津川村）協賛
2013年12月	持経宿に薪ストーブ設置
2014年2月	行仙宿にヘリで荷上げと荷下ろし（鉄筋・カマド等約600キログラム）
2014年6月	行仙宿で初社会人の作業体験研修（新入社員教育の一環）
2014年6月	玉岡憲明前代表が平成26年度環境大臣表彰を受賞
2014年7月	平治宿にロケットストーブを据付、宿内棚・靴置場を設置、毛布を備付
2014年9月	大峯奥駈道「釈迦ヶ岳～仏生ヶ岳～楊枝ノ森」間の倒木処理
2014年11月	平治宿の尾根ペンキ塗替え
2015年4月	持経宿・平治宿・行仙宿の志納金（宿泊料金）2,000円以上／泊に改定
2015年4月	南奥駈道（持経宿～太古の辻）の安全点検と倒状石柱道標復旧
2015年8月	持経宿改築・不動堂屋根葺き替え完工（2015年5月着手、延34日、職人延63名、会友延174名、寄付金520万円、寄付された木材50万円分、費用400万円）
2015年9月	大峯奥駈道・記念道標「これより・大峯・南奥駈道」（長さ2.5メートル、約25キログラム）の更新
2015年11月	玉岡憲明相談役「緑綬褒章」受賞

修験道では、峰に宿る聖性³⁰⁾を重視し、峰々の稜線を忠実にたどり、どんな小さな峰でも踏みしめて歩く。そのため、尾根を基準として、玉岡がルートを特定していったが、道を刈り拓いた部分と山仕事などである程度整備されてい

た部分とがあった。しかし、「道」は初めからそこにあったわけではなく、新宮山彦ぐるーぷの活動があったからこそ、「道」として機能するようになったという認識が地域社会では共有されている³¹⁾。



図2 山道から行仙宿までをつなぐ運搬用モノレール（2021年5月2日筆者撮影）

今でこそ、新宮山彦ぐるーぷは、様々な団体の寄付金³²⁾、地元行政からの委託料、山小屋の宿泊料などによって活動費を捻出している。しかし、主婦だったメンバーは活動当初、道づくり用の資金を調達するために「大量の空き缶を集めてきて潰したものを引き取ってもらった」と述懐する。「永年に亘る千日刈峰行は次第に多くの支援協力者にも助けられるようになり、更に発展して南奥駈道の維持作業ならびに途中にある持経宿、行仙宿、平治宿の建設・修繕・清掃へと拡大していった」（城島 2021: 83）。この3つの宿（無人小屋）は、いずれも新宮山彦ぐるーぷが維持・管理を行っている。

玉岡は「道」を担う一連の活動について、「ボランティアではなく、行（修行）として行う」と、常々口にしてきた。しかし、メンバーの活動の動機には、設立者でリーダーシップを発揮していた玉岡の願いを叶えたいという理由だけでは

説明ができない部分がある。メンバーが総じて山好きで、比較的良好な人間関係を構築できていたという背景はあるかもしれない。しかし彼らは、前田が果たそうとした「道」の再興を通じた日本古来の精神文明の復興や玉岡がたびたび口にしてきた「熊野の生き方」のようなものを継承する活動にどこかで共鳴していた側面もあったのではないだろうか。

2019年から新宮山彦ぐるーぷの3代目の世話人代表を務めている沖崎吉信³³⁾によれば、玉岡は「大峯の歴史・伝統が第一で、熊野の生き方・歴史・文化・宗教の知識を究める努力」の必要性を強調していたという。玉岡の人柄を物語るエピソードがある。新宮山彦ぐるーぷのメインの活動拠点で南奥駈道の佐田ノ辻に1990年に建設された行仙宿に、山道から山頂の中継地点まで荷物運搬用のモノレール（図2）をつけることになった。

工事は地元新宮市の株式会社カマハラテックが50万円を寄付し、新宮山彦ぐる一歩が50万円を負担して、合計100万円で請け負った。その際、体を悪くして山を歩ける状態ではなかった玉岡が、息子にひもでおぶられて、現場まで視察に来たことがあった。カマハラテックの従業員たちがその様子を見て、玉岡のこれまでの生き方を知り、社長に報告したところ、後日社長が新宮山彦ぐる一歩が負担する50万を受け取らず、全額負担したうえで、さらに50万円を寄付すると言い出した。

モノレールの工事が無事に終わり、整備も進んだ大峯奥駈道には、レジャー登山などで、観光客が気軽に訪れることも多くなっていく。また、1990年代から熊野地方全体に共通する資源として熊野古道にスポットライトが当たり、行政が主導する、「道」を通じた文化遺産化、観光化の動きが加速していくことになるが、大峯奥駈道の世界遺産リストへの記載はその後の彼らの「道」を担う活動継続の直接的な動機にはならなかったようだ。

沖崎は、宗教関係者から「大峯奥駈道が世界遺産になれたのは、南奥駈道を開拓したからだ」と言われたことはとても嬉しかったが、玉岡の「山彦ぐる一歩はあくまで歌舞伎でいうところの黒子、主役は登山者や修行者」という言葉を重く受け止めている。山の中で、仲間たちと再会したり、新しい人と出会ったり、一緒に同じ方向を向いて歩いたり、社会的な課題を解決したり、読経や写経をしたり、ご飯を食べたり、日常のことをおしゃべりしたりしながら、「地縁」や「血縁」とは異なる、「熊野の道」を媒介としたつながりによって、実践に基づいた共同性が構築されている。

5. 大峯奥駈道の管理・保全

5.1 公的機関による管理・保全

世界文化遺産リストにおける大峯奥駈道の「現在の保存状況と修理及び整備の歴史」（三重県・

奈良県・和歌山県教育委員会 2005: 68）では、「道と沿道の宿跡・行場等の交通及び宗教関連遺跡、社寺関連遺跡などを文化財保護法の下に厳重に保護しているのみならず、吉野熊野国立公園の区域にも含まれ自然環境を良好に保全されている」と記載されている。

前述した通り、南奥駈道は、民間の登山団体によって整備されたが、2002年に文化庁によって、国の文化財（史跡）に指定される際には、1999年12月に策定された「奈良県歴史の道（大峯奥駈道・熊野参詣道小辺路）整備活用計画」に沿って、2001年度に行われた文化庁「歴史の道整備活用推進事業国庫補助金」を受けた調査³⁴⁾によって、正式なルートが特定された。2002年度以降は、計画に沿って整備事業が行われ、奈良県の教育委員会や専門家が立ち会った。ただ、この時、整備されたのはほとんど熊野参詣道小辺路で、南奥駈道を含む大峯奥駈道は、主に修行者が歩く道であることから特に整備はされなかった。

大峯奥駈道の所有者は、個人（民間企業、宗教法人などを含む）、国及び地方公共団体で、資産は2県10市町村³⁵⁾にまたがっている。世界文化遺産「遺跡（文化的景観を含む）」として指定されている部分は、文化財保護法の下で、保存管理されているが、他にも管理するにあたって根拠となる法令等は、「自然公園法」に基づく特別保護地区、第1種、第2種、第3種特別地域、「森林法」に基づく保安林、「奈良県自然環境保全条例」に基づく県自然環境保全地域特別地区、その他、関係市町村が定めた条例³⁶⁾などがある。これらの法令等によって、立木の伐採、土地の形質変更、建物の高さ、意匠、色彩等を規制している。

奈良県文化・教育・暮らし創造部文化資源活用課世界遺産係主査の持田大輔³⁷⁾によると、「大峯奥駈道は吉野の金峯山寺³⁸⁾と連絡を取って、管理・保全にあたっているが、実質的な保全・管理団体を把握していない」という。「管理上の

課題は認識しているものの、大峯奥駈道は関係市町村が多数存在し、文化財史跡といえども、道が1,000メートル級の山の尾根を通っている関係で、日常的に視察しきれしていない」部分がある。

また、「奈良県では吉野町から以南の市町村には学芸員の資格を持つ専門家を配置できておらず、かといって地元のボランティア団体³⁹⁾などへの委託は自然環境的に困難なため、実質的にはほぼ新宮山彦ぐる一ぶなどの民間団体に文化財の保護、巡視を依頼している状況」にある。南奥駈道が通っている十津川村や下北山村では、職員が険しい山々の尾根を通る大峯奥駈道の定期的な巡視を行うことは困難で、年間委託料（下北山村20万円、十津川村40万円）を新宮山彦ぐる一ぶに払って道の管理や山小屋の運営を依頼しているような状況にある。下北山村と十津川村の文化財行政職員は、Facebook、ブログといった新宮山彦ぐる一ぶのSNSを確認して1回の活動ごとに活動報告を作成している⁴⁰⁾。

他にも、年に1回、文化庁、奈良県文化資源活用課が主催して世界遺産「吉野・大峯」地域連絡協議会が行われ、環境省、林野庁、奈良県景観・自然環境課、金峯山寺、新宮山彦ぐる一ぶなどが招かれて、史跡と国有林が共存・両立するエリアの管理について、情報共有や現行の体制の保全の在り方などの検討が行われている。

5.2 南奥駈道の管理・保全と山小屋の建設

『大峯奥駈道七十五靡』の著者で日本山岳会会員の森沢義信によると、明治維新まで大峯奥駈道の管理は、安禅寺から山上ヶ岳までは金峯山寺が行った。山上ヶ岳から十津川村上葛川までの奥駈道は聖護院と醍醐三宝院の両山の先達の支配下にあった。大峯奥駈道の両側八丁（約900メートル）ずつに斧や鋤を入れることが禁止され、修行の環境が保たれ、峰中の伽藍の造営や諸宿の建て替えはおろか、公儀御用の木材調達のためであっても樹木の伐採は一切御法度であった。江戸時代後期の南奥駈道では、毎年熊

野本宮に向かう山伏が通る季節になると、先達の依頼をうけた十津川郷や北山郷などの諸村の人びとが出て、生い茂るスズタケを刈り、水を汲み、薪を用意して山伏の到着を待った（森沢2006: 9）。

森沢の記述からは、大峯奥駈道が時代を経るごとに修行の環境としての要素が薄れ、道の管理・保全をめぐる形式も変わってきたことがうかがえる。現在は宗教関係者のみならず、レジャーとしての登山者や世界遺産目当ての観光客が大峯奥駈道を訪れるケースは珍しいことではなく、山小屋の建設に伴って、今後、南奥駈道周辺エリアが観光化する傾向は加速していく可能性が高い。

新宮山彦ぐる一ぶ設立者の玉岡は、「あくまでも修行の道である歴史が第一であるから、道も山小屋も過度に快適な環境を整えすぎず、最低限の物資だけで構わない」という考えを持っていた。しかし、同グループの現世話人代表の沖崎は、観光との兼ね合いについて、「レジャーやスポーツを目的とする登山は南奥駈道の文脈にはそぐわないのではないかと感じているものの、現行の体制においては、「登山者を含めた来訪者の利便性と伝統との整合性、ちょうどいい塩梅をみんなで相談しながら実施していきたい」と考えている。

「道」の観光化については、奥駈葉衣会代表の前田勇一や修験道団体の関係者も信仰を重視する観点から、南奥駈道を整備していく段階で否定的な見解⁴¹⁾を示していた。しかし、大峯奥駈道を含む「熊野の道」が文化遺産化され、外国人ツーリストを含む観光客が大挙して熊野地方を訪れ、大峯奥駈道にも全国から登山者が訪れるようになったことで、より柔軟かつ現実的な管理・保全の在り方に変わってきている。

管理している3つの山小屋はいずれも1泊2,000円で2019年は1年間で500～600人の宿泊者があったという。山小屋の情報として、世話人代表の携帯の電話番号がインターネットや山小屋

の貼り紙といった各媒体に掲載されている。登山者は事前に予約するか、山小屋に掲示された貼り紙の指示に従って電話で宿泊を申請する。その2019年には宿泊費の盗難事件があり、宿泊費徴収用の箱を鉄製にしたり、防犯カメラを設置したりせざるを得ない事態に発展した。

山小屋の利用者は高齢者が多く、リスクも高いこと、修行の「道」であることなどから、十津川村や下北山村の住民の間ではあまり観光客に来てもらいたくないという声もあるという。携帯が不通になり、家族から捜索願が出された行方不明者の捜索や、怪我を負い保険の特約を使って、ヘリコプターや救急車をチャーターするなどの対応を、十津川村や下北山村、警察と連携しながら主に新宮山彦ぐるーぷが担っている。

山小屋の所有者と山主との契約関係であるが、正式には曖昧なところがあり、下北山村や十津

川村の村長に借り受けてもらい、村長が生前の前田や玉岡に許可を出して、完成までこぎつけた経緯がある。所有者である山主は、持経宿と平治宿は国有林で、行仙宿は紀州造林株式会社（2016年に北越協立株式会社と合併し、北越紀州パレット株式会社に改称）であり、大峯奥駈道とその周辺エリアは電源開発株式会社の巡視路にもなっている。

世話人代表の沖崎は、「コンプライアンス上は、国の文化財史跡といえども、所有者がいる以上は道の保全、整備で倒木処理や枯れ木の除去、看板（図3）の設置などをするには、厳密には山主から許可をとったうえで、行うことが必要かもしれない。しかし、熊野地方で何百年にわたって行われてきた慣習によって、道周辺の作業については自分たちの判断に基づいて行い、それが原因でトラブルになったことは今までにはなかった」という。日本の登山道の現状は、



図3 大峯奥駈道上に建てられた看板（2021年5月30日に下北山村付近で筆者撮影）

管理責任が明確になっておらず、管理者が不明瞭な登山道でトラブルが発生した場合、国、地元自治体、山小屋など、その登山道に関わりの深い関係者の間で、修復をし、その費用分担について協議しなければならない⁴²⁾。

以上、まとめると、新宮山彦ぐるーぷによる「道」の保全・管理は、一方で独善的であると捉えられる可能性があると同時に、文化遺産化による地域社会の変化の方向性に対して、合意を形成する過程として捉えることもできる。山小屋（行仙宿）の建設では、新宮山彦ぐるーぷが主導して行政と民間企業の間に入って、調整・交渉している様子うかがえる。大峯奥駈道の北半分のコースは、所々に車道を含め、東西に抜けていく道があるのに対して、南奥駈道は尾根伝いに登っては下りを繰り返す、途中で登山や修行を中断し下山することが難しいコースだった。歩いてもらう人が絶えないようにするには、安全性を考慮して一日に歩ける範囲内に避難小屋を設置することが必要不可欠な条件であった。

ここまで世界遺産・大峯奥駈道の南半分、南奥駈道の管理・保全について詳述してきたが、文化財保護法、自然公園法、森林法、関係市町村の保全条例などの管理体制のなかで、実質的には新宮山彦ぐるーぷと所有者、林業関係者などが南奥駈道を担っているといえる⁴³⁾。このなかで、依拠する法令などをもたず、ボランティアとして活動しているのは新宮山彦ぐるーぷだけである。

世界遺産の熊野参詣道では和歌山県（世界遺産センター）や三重県（熊野古道センター）が中心となって、保存ボランティア団体や森林組合などと連携しながら、管理保全をめぐる対応を行う傾向が強い。大峯奥駈道の大部分が通っている奈良県では、地理的な困難さにくわえて、現在も息づいている「生きた信仰」の色濃さ⁴⁴⁾から、地域社会（新宮山彦ぐるーぷなど）が中心となって、文化財行政、民間企業、宗教団体、登山団体などと連携しながら、独自のネットワー

ク（表2）を構築して、管理・保全を行う体制がとられている。

6. 考察

修験道の「熊野の道」としての南奥駈道の近代以降の様子を、フィールドワーク調査や様々な資料、参考文献などを基に新宮山彦ぐるーぷの活動を中心に記述した。文献渉猟を行うなかで、気づいたことは、近世以前の熊野詣や西国三十三霊場観音巡礼⁴⁵⁾、信仰（修験道）に関連する書籍・論文は数多く刊行されているものの、近代以降の熊野三山の様子や熊野の信仰に関する刊行物は現在においてもほとんどないといっている事実であった。

また、従来の熊野研究でよく参照され、世界遺産リスト本文の資産関連資料にも掲載されている歴史学者による熊野に関する専門書（五来1976; 宮家1988; 小山2000など）のなかに、近代以降の熊野の信仰的側面を取り扱った記述はほとんど見当たらない。唯一、小山靖憲の『熊野古道』（2000）だけは、3部構成の1部を「熊野古道を歩く」と題して、実際に現代の参詣道を歩いて考えたことを記述している⁴⁶⁾。しかし、熊野に関するアカデミックな先行研究のなかでは限定的であり、現代史を描くというよりは、古文書の記述や歴史的事実と現地の実態との間に相違がないかを検証することに重きが置かれ、「道」の担い手たちや周辺地域の住民たちの声や様子をうかがい知ることは難しい。

もちろん、こうした傾向の背景には、世界遺産を申請する際の登録基準を満たすために、アカデミックでナラティブな説明が求められている点は否めない。本稿の2章「研究の背景」で、私は「近代から現代に至るまで、熊野の信仰に関わる歴史は誰によって、どのように継承されてきたといえるのか」と問題提起した。新宮山彦ぐるーぷや修験道の関連団体の活動・実践を念頭に置いて、記述したものであるが、その前段階として、一部の修験者や修験団体、郷土史

表2 新宮山彦ぐるーぶの交流団体（新宮山彦ぐるーぶ2016を参照）

新宮山彦ぐるーぶへの支援、援助並びに交流団体（敬称略）	
分類	団体名（所在地他）
自治体など	下北山村、十津川村、奈良森林管理事務所、熊野川町森林組合、吉野きたやま森林組合
修験寺院・団体など	小笠原謙峰G（南国市）、奥駟葉衣会（田辺市）、火生庵（高野町）、喜蔵院（吉野町）、金峯山寺（吉野町）、熊野修験（那智勝浦町）、櫻本坊（吉野町）、聖護院（京都市）、那智青岸渡寺（那智勝浦町）、前鬼山小仲坊（下北山村）、千乗院（柳川市）、大乘院（小田原市）、大日会（不明）、高松熊野修験の会（不明）、田上妙験光道院（相模原市）、竹林院（吉野町）、東南院（吉野町）、不動寺（大津市）、不動寺（奈良市）、三井寺（円城寺）・天台寺門宗（大津市）、和歌山雷観G（大紀町）
支援・交流団体など	日本山岳会関西支部・京滋支部・岐阜支部・広島支部・東九州支部・集会委員会、大垣山岳会（大垣市）、松坂山岳会（松阪市）、敦賀山岳会（敦賀市）、京都山岳会（京都市）、奈良勤労者山岳会（大和郡山市）、和歌山山岳連盟（和歌山市）、神戸山岳会（神戸市）、横浜みろく山の会（横浜市）、動霧山岳会（伊東市）、熊野川山の会（新宮市熊野川町）、新宮亀の子会（新宮市）、新宮山の会（新宮市）、はてしな山岳会（上富田町）、本宮山の会（田辺市本宮町）、京都山の会（京都市）、京都市交通局山岳部（京都市）、大阪低山践渉会（大阪府）、大丸山岳部（大阪府）、松下電器山岳部（大阪府）、十二支会山口県グループ・JAC会員（山口県）、若松山岳会（北九州市）、ザック山の会（不明）、十二支会（不明）、峰の友（不明）、無名山塾（不明）、新ハイキング社（東京都北区）、浜松悠々ハイキングクラブ（浜松市）、津峠の会（津市）、尾鷲歩こう会（尾鷲市）、田辺アルコウ会（田辺市）、みちくさハイキングクラブ（和歌山市）、堺ハイキングクラブ（堺市）、ハイキングクラブかざぐるま（吹田市）、関西地図の会（不明）、紀州わらじの会（不明）、くるる倶楽部・カモシカハイキングクラブ（不明）、やまんばの会（不明）、直心影流・礎之会（東京都）、岐阜・有明会（大垣市）、三雲グループ・立志神社秀明会（湖南市）、大島建築（新宮市）、電源開発株式会社橋本流通事業所（橋本市）、株式会社社長和（桜井市）、医療法人やまびこ会・腎循環器もはらクリニック（泉南市）、神戸グループ（神戸市）、島根・松井グループ（島根県）、今西先生を偲ぶ会（不明）、上方舞友の会（不明）
行仙宿（合宿・社員研修）	アジア協会国際森林研修（熊野川町）、医療法人やまびこ会・腎循環器もはらクリニック（泉南市）、株式会社KOTOBAWORKS及び富士通関連者（川崎市）、株式会社斉藤鉄工所・播州工場（佐用町）、上方舞友の会（不明）、上北山・下北山中学校バレー部（上北山村・下北山村）、少林寺檀原道院（檀原市）、フジポリマー株式会社（大阪市）

家による地道で、継続的な執筆活動や口頭伝承といった草の根レベルの継承活動が行われてきた。例えば、神仏分離令が発せられる1868（明治元）年に大峯奥駟道で修行を始め、1884（明治17）年に捨身行として那智の滝に飛び込んで自ら入定した修験道の行者である林実利の記録・資料が熊野地方各地に残されている。それらをまとめたフランス人のアンヌ・マリ・ブッシイによると、那智青岸渡寺の住職、高木亮孝（熊野修験設立者の高木亮英の父）や熊野那智大社

元宮司の篠原四郎、郷土史家の二河良英らが実利や熊野の修験道を伝承してきたという（アンヌ・マリ 1977: 13）。

1章「研究の目的」でも言及したが、新宮山彦ぐるーぶが生みの親と言っても過言ではない熊野修験は、高木亮英が1987年に逝去した父・高木亮孝の遺志を叶えたいという動機から翌年1988年に設立した。熊野修験は、大峯七十五磨の行場を巡拝する奥駟を年に4回（春3回、秋1回）7日間（春4日、秋3日）かけて満行踏破する団体

で、2006年の段階で20年連続して行われてきた（高木 2006: 257）。2007年3月10日に行われた第1回峰入り（那智山～熊野本宮大社）では総勢220人が参加し、年々増加の一途⁴⁷⁾を辿っている。高木は「熊野信仰の特色である開放性⁴⁸⁾に基づき、多くの人びとを受け入れてきた精神で職業、年齢を問わず参加を受け入れ、また参加者の目線、視点に立って行ってきた」と述べている。峰入りの際には、接待やボランティア、行政関係者や新宮山彦ぐる一歩関係者、地域住民、など地域社会を中心に様々な人びとが熊野修験の活動に参加したり、協力したりしている。ここではまさに、「熊野の道」の歴史とつながりたいと願う人びとの間に信仰実践に基づく共同性と地域（集団）としてのアイデンティティが形成されている。

こうした熊野の信仰の歴史を継承する流れのなかで、南奥駈道は再生したのであり、修験者である前田勇一や新宮山彦ぐる一歩の存在と活動が無ければ、吉野から熊野までつながった現在の大峯奥駈道は存在しなかった。従って、南奥駈道に限定すると、彼らの存在と活動や実践、動機や生き方そのものが、「道」の歴史を紡ぎ出し、それによって世界遺産を価値づけていると考えられる。今後、世界遺産の持続可能なマネジメント体制を構築するにあたっては、地域の人びとを中心とした担い手たちの参画は必要不可欠である。

新宮山彦ぐる一歩の活動の動機や目的には、直接的な観光振興や地域活性化などは含まれていない。彼らは、もともと山が好きで、仲間とのつながりや山行（修行としての道普請）という理念を大切に、ボランティアとして活動してきた。また、新宮山彦ぐる一歩にとって、登山とはただ山に登るだけではなく、地域社会における文化や歴史、課題について考えることでもある。さらに、「道」を媒介として仲間たちや有名な知識人、信念を持つ宗教家と出会い、思想的につながることもあった。

新宮山彦ぐる一歩の実践は、自分たちの活動の社会的価値を模索するなかで始まり、その価値を育てる方向で展開していった。また、「熊野の道」の整備を中心とする彼らの活動は、登山を通して知り合った、様々な社会的立場の人びとから様々な形で支援を受けるようになった。具体的にいうと、地元レベルの公的機関や宗教団体、民間企業などから、寄付や委託、表彰⁴⁹⁾などを受けてきた。また、メディアなどで取り上げられることで、地域内外から注目されている。

1960年代に「歴史とは何か？」を問うたエドワード・ハレット・カーは、「歴史家が歴史を作る」とするならば、「歴史を研究するためには、まず歴史家を研究せよ」と指摘した（カー 1962: 24-27）。しかし、「歴史家とは誰か？」という問いに関しては、深く考えをめぐらせていなかったといわれている（菅 2019a: 2）。その理由は、彼が活動した時代、「歴史を作る行為は専門的な歴史家だけが行うもの」と考えられており、「歴史を考える行為は、大学というアカデミックな空間に閉じ込められていた」からである（菅 2019a: 3）。

「熊野の道」の現代史を考えるうえで、歴史家とは新宮山彦ぐる一歩であり、奥駈葉衣会や熊野修験をはじめとした一部の修験者や修験団体であり、郷土史家である。彼らが様々な形で交流したり、「道」を整備したり、情報発信したりしたことによって、近代以降の熊野の信仰は継承されてきた。そして、こうした実践は、「熊野の道」の歴史に関わりたいと願う人びとの間に共同性を生じさせ、地域（集団）としてのアイデンティティを形成させている。

7. 結論

本稿の目的は、新宮山彦ぐる一歩の歴史実践を世界遺産大峯奥駈道の現代史として提示することによって、熊野の信仰（修験道）が可視化され、地域社会において受け止められるようになるまでの過程を明らかにすることであった。その結果は、次のようにまとめられる。

世界遺産大峯奥駈道の吉野山から太古の辻を経て前鬼に下るまでの北半分のコースは、修験道の成立から明治の一時期を除いて修験者による修行、つまり奥駈が行われていた。しかし、地元で南奥駈道と呼ばれる太古の辻から熊野三山までのコースでは、明治以降、ほとんど奥駈が行われてこなかった。明治以降、団体として最初に南奥駈道を含めて、吉野から熊野まで全道を通じた奥駈を復活させようとしたのは、三井寺の関係者だった。ただ、南奥駈道を整備して、現在に至るまで一般の登山者や観光客が「道」を歩けるような状態にしたのは、新宮山彦ぐる一歩の活動によるところが大きい。

世界遺産熊野参詣道を含めた「熊野の道」は、地元でしか知られていない、あるいは公には語られない、地元の人びと（新宮山彦ぐる一歩のような団体や個人）による歴史実践の積み重ねによって立ち現れてくる場合も多い（山本 2010）。しかし、この事実は世界遺産として評価されるまでには至っておらず、ユネスコが設定した統一された文化の評価基準の下で、「熊野の道」の近現代史の意味と価値の評価が行われないうまま、国家による登録（指定）、管理、保存（保全）といった制度化が進められてきた。ここには、世界遺産の登録基準を意識した申請書によって、結果的に国（文化庁）が「熊野の道」の現代史の公開性を拒み、公共性を含む歴史が簡単に国民国家の歴史に回収されてしまう傾向がうかがえる。

本研究が、あくまで歴史家が関わることで、実践が歴史として語られる、あるいは語ろうとする他のパブリック・ヒストリーの先行研究（菅 2013; 菅・北條 2019）と比べて特徴的である点は、担い手たちの実践を柱として、歴史がどのように語られ、どのようにあるべきか考察することを目的として記述した点である。新宮山彦ぐる一歩は、近代以降、修験者が去ってから「道」としての機能を失い、1980年代に入るまで本格的な整備がされてこなかった南奥駈道のルートの

特定と整備を実施し、現在に至るまで、「道」の管理・保全を行う実質的な担い手団体として活動している。彼らの実践は、文化遺産化や観光化といった現象に巻き込まれながらも、時代に柔軟に対応し、大峯奥駈道周辺の信仰に関連する景観を創出させてきた。

彼らの活動に大きな影響を与えた玉岡憲明は、非常に交友関係が広く、日本山岳会のメンバーをはじめ、宗教関係者、政治関係者、行政関係者、本業である金融関係にいたるまで、地域内外の様々な分野の知識人や人的ネットワークに通じていた。この事実は、新宮山彦ぐる一歩の活動の幅を広げ、「熊野の道」の歴史実践へとつながった。当初は登山だけを目的に活動していたメンバーたちは玉岡の生き方や知見に啓蒙され、結束し、山岳信仰の源流を辿るような「道」を復興させるプロジェクトに積極的に関わるようになる。

繰り返しになるが、世界遺産大峯奥駈道の南半分を整備したのは、行政関係者でも、宗教関係者でも、研究者でも「道」周辺の地域住民でもなく、和歌山県新宮市の民間の登山団体であった。新宮山彦ぐる一歩のメンバーは、熊野地方の人びとを中心として構成され、平日にはそれぞれの仕事をこなし、週末には仲間とともに趣味の山登りに講じる団体である。

ここまで、世界遺産をはじめとしたアカデミック・ヒストリーと新宮山彦ぐる一歩の活動であるパブリック・ヒストリーの両者の関係を前者に回収されない後者の存在があることを強調する形で論じてきた。しかし、歴史学者や専門家らによって表象されてきたアカデミック・ヒストリーは、パブリック・ヒストリーとしての「道」の担い手たちに対して、「熊野の道」の歴史に関する気づきときっかけをもたらした側面もあったと考える。

歴史学者や専門家らによる知識生産や社会実践という下地のうえに、広い意味での「熊野」は再発見、再創造されたのであり、彼らの活動

がなければ、大峯奥駈道は世界遺産リストに記載されることもなく、熊野地方は人口減少が進む一方のエリアになっていただろう。また、新宮山彦ぐる一歩世話人代表の「世界遺産を意識して活動してきたわけではないが、あなたたちのおかげで大峯奥駈道は世界遺産になれたと感謝された時は嬉しかった」という発言は、アカデミック・ヒストリーとパブリック・ヒストリーが相互に補完し合う関係であることを示している。ただ、こうした関係が成立した要因は、大峯奥駈道が通っている場所が、アカデミック・ヒストリーの担い手である行政関係者⁵⁰⁾ にとって、容易に近寄れない山岳地にあったことに尽きると思われる。本論文では、行政関係者と民間事業者は、条件さえ合致すれば、互いに支え合いながら、信頼関係を構築することによって、文化遺産を担うことができるという事実を明らかにした。

経済的効果を重視しながら、持続可能な文化遺産マネジメントを構築するためには、現場をよく知る地域社会と公的機関が協働して、文化財の価値の体系に留意しながら、各利害者間の調整を丁寧に行っていく必要がある。そして、文化財や文化遺産に関わりたいと願う人びとの参画を継続的に受け入れていくことを可能にするには、自分たちの実践が歴史を作っていくという手応えや地域社会からの共感的な理解を得られることが重要である。それを後押しする形で、重要な役割を果たすと考えられるのが文化遺産に関連する各分野における専門家や研究者、行政関係者らによる知識生産と社会実践である。

そして、自分たちの実践が新しい「熊野の道」の歴史を作っていく実践でもあることを、担い手たちが実感を伴いながら前向きに活動できるようになるためには、パブリック・ヒストリーがアカデミック・ヒストリーに影響を与え、アカデミック・ヒストリーがパブリック・ヒストリーを不断に修正するような相互関係と仕組みの構築が求められる。つまり、新宮山彦ぐる一

歩のような地元の人びとによる歴史実践が熊野の地域観と文化遺産観の形成において重要な役割を果たしたという事実を詳らかにし、両者の関与・交流を活発化させるような取り組みが求められている。

今後の課題として、ある歴史的事象や文化的要素とどう関わるかは、個人の経験や目的などによって多様であるが、新宮山彦ぐる一歩に属する個人の違いについて、十分に論じることができなかった。パブリック・ヒストリーにおける個人の視点の取り扱いについては、インターネット環境の普及やSNSの発達などによって、日常のかつ専門性にとらわれず、比較的気軽に情報を発信・共有することができることによって、今後ますます重要な観点になってくると思われる。

また、大峯奥駈道の所有者と使用者の関係性について、文化財や文化遺産の文脈で明確にする必要がある。所有者は民間であるが、公的な場所（エリア）でもあるという二重構造は、地域社会における変化の方向性に対して合意を形成するうえで、どのような意味作用を持つかについても、言及することができなかった。以後、念頭に置いて研究を進めていく所存である。

謝辞

本論文は総合研究大学院大学の2021年度SOKENDAI研究派遣プログラム（2021/4/1～2022/3/5）からの助成を受け行った調査活動で得られた成果の一部です。調査活動を通じてお世話になった、プログラムの受入機関である国際熊野学会をはじめ、新宮山彦ぐる一歩のメンバーの皆様、調査にご協力いただいた方々に、この場をお借りして、厚く御礼申し上げます。また、本論文執筆にあたって、ご指導いただいた総合研究大学院大学先端学術院人類文化コースの先生方、2名の査読者、助言や添削などの形で協力してくれた大学院生の仲間たちに、心より感謝申し上げます。

注

- 1) 現在の大峯奥駈道における太古の辻と呼ばれる地点から熊野本宮大社までのルート。
- 2) 1988年に那智青岸渡寺の高木亮英によって設立された現代修験道団体。高木は、立ち上げの際、新宮山彦ぐる一ぶの3人に案内してもらい、自分を含む4人で南奥駈道を歩いたことが、団体としての活動の第一歩だったと述懐している（高木 2020）。
- 3) 熊野那智大社に隣接し、1161年に成立した「西国三十三霊場観音巡礼」（西国巡礼）の第一番霊場。世界遺産「紀伊山地の霊場と参詣道」の構成資産の一つでもある。
- 4) 修験道に関わらない地域社会の参加や支援、協力を受け入れながら、熊野から吉野にかけて年4回（春と秋）、合計7日間で大峰七十五靡を巡拝する（大峯奥駈順峯）もので、2006年の段階で20年連続して行われてきた（高木 2006: 257）。
- 5) 新宮山彦ぐる一ぶの設立者である玉岡憲明は、環境大臣表彰や緑綬褒章などの受賞歴があり、南奥駈道の整備活動は社会的に評価されていると考えられる。ここで評価されていないと指摘したのは、新宮山彦ぐる一ぶの現在進行形の道を管理・保全する活動であり、正式には歴史としてみなされていないことに起因すると思われる。
- 6) ユネスコが1992年に設定した概念で、「自然と人間の営みによって形成された景観」と定義されている。
- 7) 「新たな生を胎内に宿すと同時に自らも死んだと観念して、母胎回帰と擬死再生結合し、生一死一再生の過程を体験する修行」（鈴木 2009: 23）とされ、山に入って苦行を重ねながら踏破することを「奥駈」もしくは「峰入り」と称した。
- 8) 「室町時代以降は、大峯山全体が曼荼羅とされ、吉野側を金剛界、熊野側を胎蔵界とし、峰入りで金胎一如を実現すると考えられた。」（鈴木 2009: 24）小学館『国語大辞典』によると、「大和の大峰山入りが略されて、峰入りになった」と説明されている。
- 9) 「墓掘りを山作り、埋葬を山仕事、出棺を山行きと呼ぶ地方があり、仏教寺院も必ず『山号』をもつ」（鈴木 2009: 11）など、葬送儀礼などで山と関連付けて語られることが多いことから、山岳信仰の日本文化に及ぼす影響力は大
- きいと思われる。
- 10) 里に依拠し定着性の顕著な修験者で修験道の一形態であり、ほぼ近世期以降の修験道に該当する（宮本 1984: 5）。
- 11) ここでは全国津々浦々からの徒歩による熊野詣を指して使用している。実質的には大正時代に終わりを迎えたといわれている（宇江 2004b: 9）。
- 12) 本山派は天台系の聖護院を拠点として、根拠地を熊野に定めて、胎蔵界とみなされた熊野から金剛界とみなされた吉野に向けて進む順峯と呼ばれる大峯奥駈修行をおこなった。当山派は、真言系の醍醐寺を拠点として、根拠地を吉野に定めて、吉野から熊野に進む逆峯を行った。
- 13) 当山派と本山派の両派の末寺は、その多くが廃寺となり、神社ともなった。また、末寺では戦後に信教の自由が認められた後も、両派に残った寺院も多い（田中 2020b: 49）。
- 14) 文化財行政関係者や歴史学、保存科学の専門家、ジャーナリストなどによって表象される世界遺産リスト本文を含めた歴史的記述を「世界遺産としての歴史」と表記した。
- 15) 2025年国際博覧会（大阪・関西万博）に向けて高速道路や鉄道網など会場周辺のインフラを整備する関連事業計画が決められ、紀伊半島の海沿いを1周する形で高速道路が開通する予定であったが、2023年の段階でまだ全道を通した開通の目途は立っていない。
- 16) 1910年5月、日本各地で多数の社会主義者、無政府主義者が明治天皇暗殺を計画したとの理由で検挙され、翌1911年1月26名の被告が死刑その他の刑に処せられた事件。
- 17) 神社合祀令を和歌山県（新宮藩を含む紀州藩）で特に、強制威圧的に推進しようとしたことについては、下記の南方熊楠記念館HP（2023年11月24日、最終アクセス）を参照にされたい。和歌山県田辺市出身でエコロジストの南方熊楠は、神社合祀反対運動を展開し、民俗学者で当時、高級官僚だった柳田国男が支援を行ったエピソードが残されている。（<http://www.minakatakumagusu-kinenkan.jp/kumagusu/life/goushiantai>）
- 18) 2007年3月に設立された地域づくり任意団体「熊野川体感塾」を主宰する谷上嘉一は、上流にダムができる以前と現在とでは、実感として川魚の量が10分の1程度に減少したという。2021年8月28日に実施したヒアリング調査から。

- 19) 熊野学とは広範で深遠な熊野の歴史・文化を人文・社会・自然科学などの各分野から学際的・総合的に研究し、熊野が持つ独自性と普遍性を解明するとともに、その個性と魅力を検証していくこと。新宮市教育委員会文化振興課HPより引用。(https://www.city.shingu.lg.jp/div/bunka-1/htm/kumanogaku/summary/index.html) 最終アクセス日、2023年9月11日。
- 20) 熊野大学は1990年に設立された、「試験もない、校舎もない、校則もない」「だれでもいつでも入学でき、卒業は死ぬとき」という学校で、毎年恒例の夏期特別セミナーでは、著名な評論家、作家、文化人等をゲストに招いて開催されている。
- 21) 熊野大学HPより引用。(http://kumanodaigaku.com/data/message.html#01) 最終アクセス日、2023年8月18日。
- 22) 景観人類学では景観を「人間の記憶、意味、行為が埋め込まれた環境」と定義し、「歴史、記憶、物語、愛着、アイデンティティなどが埋め込まれた環境」を場所、「そうした意味や感情が込められていないただの環境」を非場所という(河合 2020: 16-17)。
- 23) 2021年5月19日に那智青岸渡寺にて高木亮英からヒアリング調査をおこなった。
- 24) 奈良県吉野郡上北山村の大台ヶ原山頂付近に1899年に建築された神道系の宗教施設で、一般の登山客にも宿泊施設として提供してきたといわれている。
- 25) 和歌山県東牟婁郡那智勝浦町口色川にある地藏堂。修験道の行者や山伏が守ってきたといわれている。
- 26) 奈良県吉野郡川上村神之谷に位置する標高1,378mの山。大峯奥駈道は通っていないが、周辺エリアに位置している。
- 27) 所有者を含む周辺地域にとって、山道づくりは山の管理、作業をするうえで、機材や資材の出し入れなどのメリットが多く、エリアにもよるが、熊野地方では既に山中に「道」、あるいは「道」らしきものが部分的にでもあると想定される場合、周辺の草木はある程度刈って、整備しても構わないという不文律があると思われる。
- 28) 今西と登山、野外での宴会、カラオケをしたことがとても印象に残っていると語るメンバーも多い。よく熊野に登山で訪れ、記者やテレビ局も同行し、取材用のヘリコプターまで飛んだという。
- 29) 前田は「奥駈葉衣会」とともに、「南奥駈道の史蹟と自然を愛する同好会」も組織している(宮家 1988: 462)。
- 30) 峰は天と地の境界であり、そこに偉大な力が宿ると信じられた(鈴木 2009: 20)。
- 31) 筆者が2009年に岡山大学大学院社会文化科学研究科に提出した修士論文「世界遺産『熊野古道』を保護するということ—文化的景観『信仰の山』の理念と実践のゆくえ』を作成する際、文化財行政関係者を中心におこなったインタビュー調査で複数人から聞き取った。
- 32) 三井寺、聖護院、金峯山寺からそれぞれ年間50～60万円ほどの寄付金の提供を受けている。
- 33) 2021年4月13日に、沖崎氏のご自宅にてインタビュー形式のヒアリング調査を実施した。
- 34) その成果は『奈良県歴史の道調査 熊野古道小辺路調査報告書』(奈良県教育委員会 2002)としてまとめられている。
- 35) 奈良県五條市、吉野郡吉野町、川上村、黒滝村、天川村、上北山村、下北山村、和歌山県新宮市、田辺市の10市町村。
- 36) 「田辺市歴史文化的景観条例」、「新宮市歴史文化的景観保全条例」、「吉野町歴史的景観保全条例」、「川上村大峯奥駈道の歴史的景観及び文化的景観条例」、「大峯奥駈道の歴史的景観及び文化的景観を保全するための黒滝村条例」、「十津川村熊野古道小辺路及び大峯奥駈道の歴史的景観及び文化的景観保全条例」に基づく景観保全地区が設定されている。
- 37) 2021年12月17日、奈良県庁においてインタビュー形式のヒアリング調査を実施した。
- 38) 修験道の中心寺院で、修験道の霊場・吉野の中心的伽藍として信仰を集めてきた。
- 39) 本稿におけるボランティア団体は、ボランティアとしての道の整備・保全をおこなう団体を指して使用し、ボランティア活動そのものを目的としない民間団体と区別している。
- 40) 2021年6月9日に下北山村教育委員会、2021年6月15日に十津川村教育委員会で、担当者にインタビュー形式のヒアリング調査を実施した。
- 41) 前田勇一は、亡くなる直前の1981年2月8日の書簡において、新宮山彦ぐるーぶが平治宿に便所を造設しようとしていることに対して、「あそこは高貴な方がお籠りになられるので、チャンプと云うのは如何にも下々の音で失禮です」と述べて、トイレ設置に反対している(玉岡 1992)。また、聖護院の僧侶で本山修験宗・宗務総長を務めた宮城泰年は、「道の整備も大

- 切だが、疲労の重なった一日の終わりのコースに段差のきつい梯子を見ると、世界遺産登録での整備に疑問を持たざるを得ない」と世界遺産となった大峯奥駈道の現状を批判している（宮城 2006）。
- 42) 2018年に、登山道に関心を寄せる山岳会会員、大学研究者、行政職員、自然愛好家、山岳誌編著者などの有志が集まり、開催されてきた「登山道法研究会」によると、登山道は日常的に維持管理しなければならない施設であるにも関わらず、法令や管理協定などが十分に整備されていないまま放置されている現状があるという（登山道法研究会 2022）。
- 43) 吉野から大峯山寺までの大峯奥駈道は、1991年に金峯山寺関係者らによって設立された「吉野古道保存会」と呼ばれる団体が、踏破調査や整備を進めてきた。現在は「秀宝院」という滋賀県草津市の行者講が定期的に山小屋の管理や道の保全、整備などを行っている。2021年6月20日に実施した参与観察とヒアリング調査から。
- 44) 本稿では、あまり言及していないが、宗教社会学者の天田顕徳によれば、現代の大峯奥駈修行は、「講に支えられた修行となっていない一方で、地縁や血縁によらない、いわば『修行縁』とも呼べるものによって支えられている」（天田 2019: 8）という。
- 45) 熊野古道伊勢路は、伊勢から西国三十三霊場一番札所・那智青岸渡寺を目指す観音巡礼の道であることが知られている。
- 46) 「歩いて学ぶ歴史」を提唱した神戸大学の戸田芳実は、熊野地方にもたびたび訪れ、学生を連れて熊野古道の踏破調査を行ったり、「熊野の道」に関する本（戸田 1992）を出版したりしている。小山は著書『熊野古道』（2006）のなかで、戸田の研究に依拠したところが少なくないと認めており、影響が大きかったものと思われる。
- 47) 熊野修験の信仰実践の参加者のなかには、外国人（アメリカ、カナダ、イギリス、フランス）も含まれる（高木 2006: 257）。
- 48) 熊野は「男女を問わず、貴賤を選ばず、浄不浄を嫌わず」、すべての人びとを救済する聖地とされてきた。
- 49) 2004年シチズン・オブ・ザ・イヤー賞の受賞や2016年の公益財団法人社会貢献支援財団「第47回社会貢献者表彰受賞者」としての表彰などがあげられる。
- 50) 行政関係者は、職務として歴史学者や専門家が表象したアカデミック・ヒストリーの代弁者としての立ち位置であるが、職務を離れたところで、ボランティアとして、個人的な興味・関心、使命感などから行う歴史実践に関しては、この限りではない。

参考文献

- 天田顕徳
2019 『現代修験の宗教社会学—山岳信仰の聖地「吉野・熊野」の観光化と文化資源化』岩田書院。
- アンヌ・マリ ブッシイ
1977 『捨身行者実利の修験道』角川書店。
- 今西錦司
2014 『岐路に立つ自然と人類—「今西自然学」と山歩き』アーツアンドクラフト。
- 植島啓司
2009 『世界遺産 神々の眠る「熊野」を歩く』集英社。
- 宇江敏勝
2004a 『熊野修験の森—大峯山脈奥駈け記』新宿書房。
2004b 『世界遺産 熊野古道』新宿書房。
- カー E.H (清水幾太郎)
1962 『歴史とは何か』岩波書店。
- 河合洋尚
2020 『景観人類学入門』風響社。
- 神田孝治
2010 「熊野の観光地化の過程とその表象」『国立歴史民俗博物館研究報告』156: 137-160。
- 小山靖憲
2000 『熊野古道』岩波新書。
- 五来 重 (編)
1976 『吉野・熊野信仰の研究』名著出版。
- 城島紀夫
2021 「大峯・南奥駈道を復活させた『新宮山彦ぐるーぶ』」『山岳文化』22: 81-85。
- 齋藤純一
2000 『公共性』岩波書店。
- 新宮市
1937 『新宮市誌』新宮市。
- 新宮山彦ぐるーぶ
2016 『新宮山彦ぐるーぶ創立40年の活動の歩み：行事回数・実施日・行事名・参加者一覧表』新宮山彦ぐるーぶ。

菅 豊

2013 『「新しい野の学問」の時代へ—知識生産と社会实践をつなぐために』岩波書店。

2019a 「パブリック・ヒストリー—現代社会において歴史学が向かうひとつの方向性」菅 豊・北條勝貴（編）『パブリック・ヒストリー入門—開かれた歴史学への挑戦』1-12、勉誠出版。

2019b 「パブリック・ヒストリーとはなにか？」菅 豊・北條勝貴（編）『パブリック・ヒストリー入門—開かれた歴史学への挑戦』3-66、勉誠出版。

菅 豊・北條勝貴（編）

2019 『パブリック・ヒストリー入門—開かれた歴史学への挑戦』勉誠出版。

鈴木正崇

2009 「大峯山の修験道—自然とともに生きる信仰の実践」『季刊民族学』127: 3-29、財団法人千里文化財団。

2015 『山岳信仰—日本文化の根底を探る』中公新書。

高木亮英

2006 「熊野修験再興」『天台学報』49: 255-262。

2020 「熊野修験再興33周年を迎えて」森 武史（編）『熊野修験』月兎社。

田中 滋

2021a 「序章 聖地・熊野の世界遺産化を読み解く—ナショナルイニシアチブ論からのアプローチ」田中 滋・寺岡憲明（編）『聖地・熊野と世界遺産—宗教・観光・国土開発の社会学』1-29、晃洋書房。

2021b 「第一章 神仏の〈交流〉から分離へ—修験道政策から観る〈国家と宗教〉の関係史」田中 滋・寺岡憲明（編）『聖地・熊野と世界遺産—宗教・観光・国土開発の社会学』29-53、晃洋書房。

2021c 「第三章 濫伐される熊野—繁栄と災害のパラドックス」田中 滋・寺岡憲明（編）『聖地・熊野と世界遺産—宗教・観光・国土開発の社会学』72-80、晃洋書房。

2021d 「第四章 電源開発と熊野の変貌—ナショナルイニシアチブから省有化へ」田中 滋・寺岡憲明（編）『聖地・熊野と世界遺産—宗教・観光・国土開発の社会学』81-101、晃洋書房。

玉岡憲明

1992 「千日刈峰行とその展開」『熊野誌』38、熊野地方史研究会・新宮市立図書館。

寺西貞弘

2005 「『紀伊山地の霊場と参詣道』の世界遺産登録と今後の課題」佐藤 信（編）『世界遺産と歴史学』81-107、山川出版社。

登山道法研究会（編）

2022 『これでいいのか登山道—現状と課題』山と溪谷社。

戸田芳実

1992 『歴史と古道—歩いて学ぶ中世史』人文書院。

豊島 修

1990 『熊野信仰と修験道』名著出版。

奈良県教育委員会

2002 『奈良県歴史の道調査 熊野古道小辺路調査報告書』奈良県教育委員会。

林 雅彦（編）

2007 『国文学 解釈と鑑賞 別冊 熊野—その信仰と文学・美術・自然』至文堂。

保莉 実

2004 『ラディカル・オーラル・ヒストリー—オーストラリア先住民アボリジニの歴史実践』お茶の水書房。

三重県・奈良県・和歌山県教育委員会

2005 「II. 本文」『世界遺産 紀伊山地の霊場と参詣道』41-47、世界遺産登録推進三県協議会。

宮城泰年

2006 「『大峯奥駈道』 実地探査の意義」森沢義信『大峯奥駈道七十五靡』i-iii、ナカニシヤ出版。

宮家 準

1988 『大峰修験道の研究』佼成出版社。

宮本袈裟男

1984 『里修験の研究』吉川弘文館。

本中 眞

2022 「紀伊山地の霊場と参詣道」佐藤 信（編）『世界遺産の日本史』筑摩書房。

森沢義信

2006 『大峯奥駈道七十五靡』ナカニシヤ出版。

山崎 泰

2007 「庶民の熊野信仰（近現代）」林 雅彦（編）『国文学 解釈と鑑賞 別冊 熊野—その信仰と文学・美術・自然』77-83、至文堂。

山本恭正

2010 「世界遺産『熊野古道』における『文化』
概念の再検討—文化的景観『信仰の山』
をめぐる理念と実践」『白山人類学』13:
93-115。

Kelly, Robert

1978 Public History: Its Origins, Nature, and
Prospects, *The Public Historian* 1(1), 16-28.

2023年9月29日 受付

2023年12月1日 採択決定

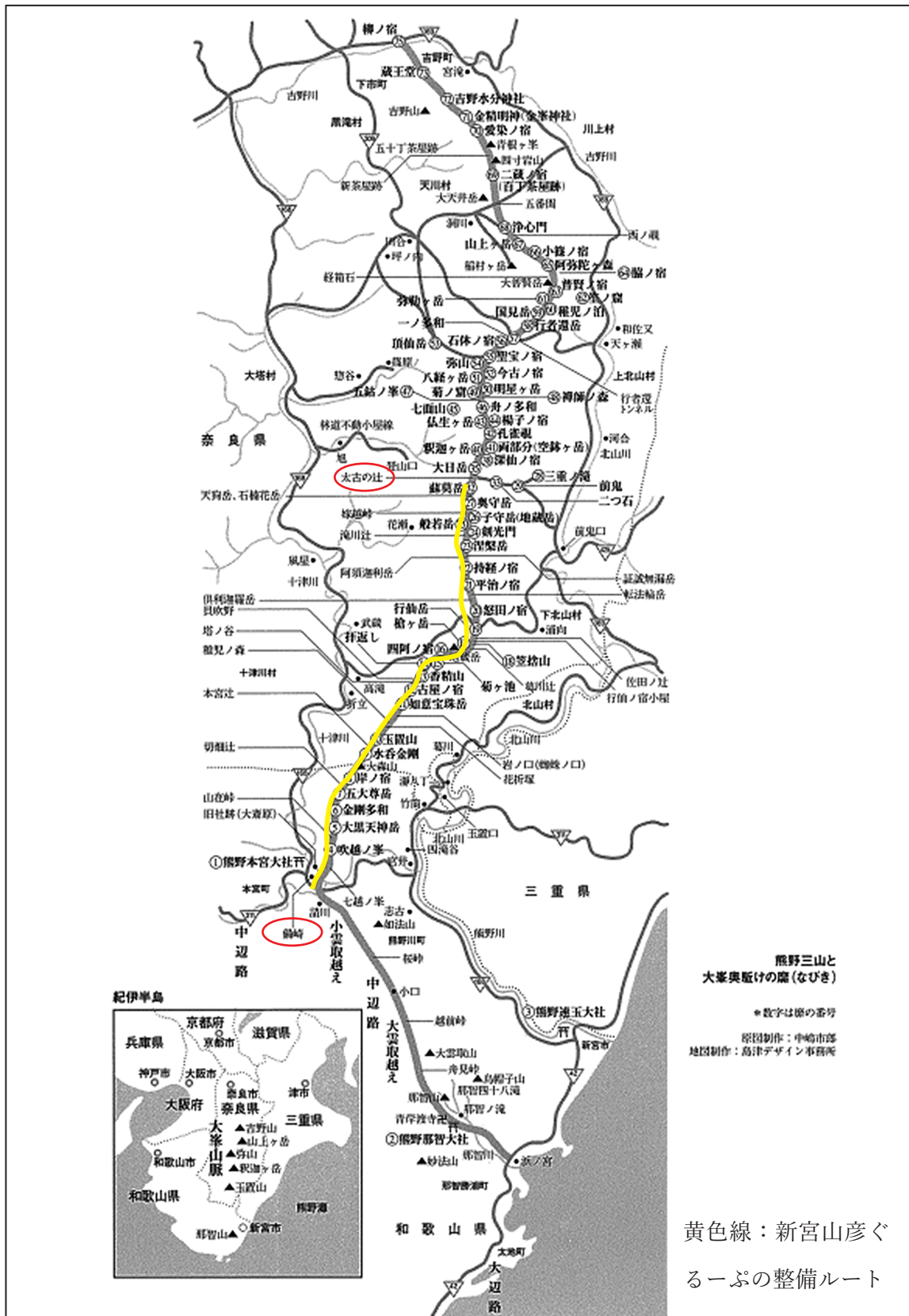


図1 大峯奥駈道とその位置関係 (宇江 2004a) より引用して筆者加工